卒業生に贈る言葉

平静にそして断乎として

松山義則

二十年をこえる長い年月を、家庭生活と学校生活とにすごされ、いま、社会に門出する時をむかえられました。心からお祝いを申上げます。これから皆さんは、新しい職場、環境において、ひろく未知の人びとと会い、その人たちと新しい人間関係を開始されることとなります。新しい環境に対しては新鮮な期待があり、希望があり夢があふれ、また不安や危惧もありましょう。そして、いままでの経験や知識また考え方によって、その環境を予測し、それに対処する心がまえを用意しておられるでしょう。ところが環境は新しくなり、はじめての職場に入って、仕事も友人も変っても、そこに生きる主体は自分であり、自己であることにはかわりがありません。

今年は、戊辰の年であります。人びとは干支にことよせて、辰年は発展上昇、急激な変化の時期などと言います。干支のことは別としても、現代はまことに激動の時代であり、将来を予測することのむずかしい時期であります。いまから一二〇年以前、一八六八年、

明治元年は戊辰の年でありました。長くわが国を支配していた徳川幕府が倒れ、それにかわって明治政府が樹立されるという政変の激動のときであり、薩長を中心とする西軍が、長岡、新潟、白河に布陣する奥羽越の同盟軍を破り、遂に会津藩を降伏させる戊辰戦争が生じました。権力の交代にはめまぐるしいほどの激変があり、離合集散があり、相互不信があります。幕末から維新そして明治初頭のわが国の状況には、長州と薩摩の友好と離反の歴史をはじめ、権力集団間の離合のはげしさは目を覆うものがありました。そして、そこには戦争の不毛なくりかえしがあり、数多くの尊い生命が失われ、人びとの悲痛な叫びと苦悩とがありました。勝者は勝利に酔い己を正義とよび、敗者を無情なまでに、徹底的に罵倒し恥辱しつくすことでありました。会津藩砲術指南の家に生れた山本やえも、新政府軍の物量をもってする砲撃にさらされた鶴ガ城にたてこもり、硝煙のこもる死闘のなかに銃をもって戦い、敗亡の悲嘆さを身をもってあじわいました。戦勝におごる明治政府は無残にも会津藩士の死者を葬ることさえも許さずその屈辱にたえねばなりませんでした。山本やえは後の新島先生夫人であります。

人間の社会は、よく言えば互に切磋琢磨し向上するところであり、ありていに言えば、はげしい生存競争のなかで人に勝ちぬくために能力のかぎりをつくすところであります。社会において、人びとがともに生きていくとき、職場においても友情においても人と人との間に波たたぬことはありません。人間の契りや相互理解も万全ではなく、友が敵にかわることもしばしばです。自己主張をし、人の優位に立つために、自己を正当化し理屈を述べたて、その発言の正しさを見きわめることは至難でさえあります。幕末維新にかけて、

政治的かけひきと権力のはげしい推移のなかで、官軍という言葉はあちこちに行きかい、ついには勝てば官軍となりました。人間の歴史はこのように競争、戦いであり、互に人をおとし入れ、官軍、正義、正論という優位をもって相手をおどし論争に勝つことに汲々とすることであります。人間がこの世に生を享け、ひとりひとりが貴い人生を歩んでいくときに、競争に勝利するためにのみすべてを労するということはあまりにもぎすぎすした無意味なもの無残なものとなることでしょうか。

みなさんはこれから学窓を巣立ち、荒れくるう社会の大洋のなかに自らの頭脳をもって思考し判断し、自らの手と足とをもって行為しなければなりません。職業人、社会人として自己に託せられた任務を遂行する責任主体であります。日々問題に直面し、緊張した思いと、くるしい息づかいのなかで、これを解決していかねばならないのであります。戦いを放棄することも任務や責任を果さないでいることもできません。勇気をもって忍耐をもって事にあたる外はありません。人生はこの激しい一日一日のなかで「異質なものとの共生、共存」が人の宿命であります。異質なるものと同化することはできず、自分の考えや感じと全く異なる人びとと共生することには苦痛がともなうことであります。しかし、人間は異質なるものと共存するための努力を捨てることはできません。競争社会、異質なるものとの衝突のなかにあって、平静に対処し、そして自己の信じるところを断乎として行為する外はありません。どんなに苦しくせめられるときにも心の平静を失わず、じっと耐えて平常心に生きるとき解決の道は見出されるでありましょう。世の人は、あなたに心の動揺をあたえ、感情をたかぶらせ、それによって判断をあやまらせようとするからです。

平静にしてしかも、為すべきことを断乎として行う勇敢な魂をもつべきであります。けれども平静にして断乎と対処するとは言うは易く行うに難いものでありましょう。

人びとはいろいろな計画をもち、その計画は人によって異なり、利害も対立しています。しかし、この世界はかならず結論がでます。始めあれば終りありという言葉のごとく解決に向うものであり、よく見れば、人と人との争い対立も、神の計画のなかにあり、すべてが神のはかりごとの上にあると信じるとき、異質なるものとのきびしい対立や苦しい共生にも寛容と温和の心がわき、感謝と余裕がもたらされるでしょう。勝海舟は「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張。我に与らず。我に関せず」と述べています。幕末維新にかけて苦しい決断と幕府の無血開城にあけくれた勝海舟は、すすんで事を為すことも、しりぞくことも自分の責任であるが、これを賞讃し、あるいは軽蔑罵倒を受けるともこれは他人の主張であり、私に関することではないと考えていました。新島先生の生涯をみても、そのすべては苦闘の連続であったと思います。同志社大学設立に賭して、その経営財政の確立、学内の人事の対立を一日一日解決にむかって努力し乗りこえていく忍耐にみちた生涯であったと思います。

社会の矛盾のなかにあって、われわれは神がすべてを導き、神の計画が実現されつつあることを信じたいと思います。どんなに苦しいときにも、神はあなたと共にあり、神はあなたを見放すことも見捨てることもありません。この確信に立って、平静に断固として温和を失うことなくすごしたいと思います。聖書には、悪をもって悪に報いず、できるかぎりすべての人と平和にすごしなさいと教えています。また、自分で復讐しないで、むし

ろ、神の怒りに任せなさい。もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになると言われています。卒業生のみなさん。元気よく明るく歩み出して下さい。ご健康とご多幸とを心から祈ります。

（同志社総長）

良心を手腕に

原　正

同志社大学を卒業される皆さんに心からお祝いを申しあげます。皆さんが本学に入学されてから今日に至るまでには、いろいろな事があったのではないかと推察しています。もちろん皆さんは、みずからの努力によって本日の卒業式を迎えることができたわけでありますが、本学での学生生活を通じ、経済的にも精神的にも、また勉強のうえでも多かれ少なかれご家族、友人、先輩、恩師などのお世話になったことを謙虚に認めなければならな

いと思います。特にお世話になったかたがたには、是非とも卒業の喜びを報告し、挨拶をしていただきたい。これは、皆さんが社会人として巣立っていくための第一関門といえましょう。

さて卒業式のことを英語でコメンスメントと言うことはよく知られておりますが、このコメンスメントには、そのほかに「開始」、「始まり」などの意味があります。これからもわかりますように、卒業式とは、まさに社会人としての「始まり」を意味しているわけであります。

皆さんは、いま同志社大学を卒業して社会人としての第一歩を始めようとしておりますが、今後健全な社会人として大きく育つために、これまでの学生生活を反省してみることは極めて有意義なことではなかろうかと思われます。

同志社の創立者新島襄先生は、一八七五（明治八）年、日本を救う道は教育の事業をおいてほかにないと考え、一国の良心ともいうべき人民を養成する目的をもって官許同志社英学校を始められました。そして神を信じ真理を愛し人を尊敬するキリスト教主義を徳育の基本とする教育を行うことによって、自主、自立、自由の精神に富み、良心を手腕に運用する力強い人物の育成を期待されました。新島先生の理想ともいうべきこの願いは、「良心碑」として今出川、田辺両キャンパスとも正門を入ったところに、「良心ノ全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ランコトヲ」と象徴的に刻まれております。

新島先生の願いを実現されるのは、卒業していかれる皆さんをおいてほかにありません。どうか良心を手腕に運用する力強い同志社人として人生を歩んでいただきたい。良心

を失いかけた今の社会が、そして世界が皆さんを待ち望んでいるのです。本学を卒業するに当って皆さんの周囲を、そして不透明かもしれませんが予想される未来を、もう一度じっくり考えてみてはいかがでしょう。

皆さんがこれから入って行かれる現実の社会は、決して安易なものではありません。科学技術の日進月歩の中にあって、私達をとりまく環境はすさまじい勢いで変化しつつあります。そのような環境の中で生きるためには、いやおうなしにそれに適応しなければなりません。それは、ときに苛酷なまでの競争やがんじがらめの管理社会に耐えることを要求されます。このような状況のもとで、人間に本来あるべき心の豊かさや、ゆとりを求めても、それは、しょせんむつかしいことでありましょう。このように考えてまいりますと、二十一世紀に向けて、新島先生の願われた良心教育が極めて大切であることをご理解いただけると思います。皆さんは、そのような良心教育をベースとする同志社大学での学業をおえられ、これから社会へ出られるわけであります。したがって皆さんこそ社会の核となり地の塩となって社会に貢献し、また社会をリードする責任があります。

本学での勉学を通して、皆さんは「人間とは何ぞや」、「人生いかに生くべきか」などについて学び、また「人間の最高の生き方が他人のためにつくすことにある」なども理解されたことと思います。競争の激しい現実の社会にあって、他人のためにつくすなんて矛盾もはなはだしいと思われるかもしれませんが、そのような矛盾を真実矛盾と感じなくなる境地を目ざし、一生かけて私達は修業しているとも言えましょう。そして現実には、そのような矛盾を克服していくために私達は、悩み、苦しみ、そして努力しているのではない

でしょうか。

最近、アメリカの代表的経済紙「ウォールストリート・ジャーナル」に掲載されたハイテク企業ユナイテッド・テクノロジー社の広告に次のようなものがありました。「もし君がときに落胆することがあったら、この男のことを考えてごらん。小学校を中退した。田舎の雑貨屋を営んだ。破産した。借金を返すのに十五年かかった。妻をめとった。不幸な結婚だった。上院に立候補。二回落選。下院に立候補。二回落選。歴史に残る演説をぶった。が聴衆は無関心。新聞には毎日たたかれ、国の半分からは嫌われた。こんな有様にもかかわらず、想像してほしい、世界中いたるところのどんなに多くの人々が、この不器用な、ぶさいくな、むっつり者に啓発されたことかを。その男は、自分の名前をいとも簡単にサインしていた。A・リンカーン、と」。これは奴隷解放に生命をかけて斗い、みごと成功させたリンカーンの波乱万丈の人生を述べております。

皆さん、これから先の人生においてもしも失意に沈むようなことがあった場合には、是非ともこのリンカーンのことを思い出していただきたい。そして勇気をふるい起こし力強く進んでいただきたい。そこにきっと光明を見い出すでありましょう。

最後に卒業生ひとりひとりの上に豊かな神の恵みがありますよう祈ります。

（同志社大学長）

卒業生に贈る言葉

二つの詩を

石田　章

卒業おめでとうございます。

いま新たな旅立ちをしようとしているあなた方に、前途の幸多きを祈り、心をこめて祝福の言葉を送りたいと思います。と同時に、私は、私からもあなた方にありがとうと言わせていただきたいのです。私は、今年もまた、沢山のよき学生たちに恵まれました。そういう彼女たちを世に送り出すことのできるのを心からうれしく思うからです。

あなた方は、同志社女子大学に学び、同志社女子大学を巣立って行くのです。あなた方が、それぞれの青春の真っ只中の二年あるいは四年間を、この同志社女子大学で学んだという事実を、これからも大切に覚え、誇りにしていって欲しい。同志社女子大学は、あなた方の心の故郷（ふるさと）です。だから、卒業した後も、うれしい時、悲しい時、心痛む時、心晴れやかな時、なん時でも、あなた方の母校を訪ねてきてください。私たちも、それを待っていますから。

これから、新たな人生へと船出して行くあなた方に、私は二つの詩を送り、それを私のはなむけの言葉にかえたいと思います。

あなた方がこれから船出して行く実社会という航海は、決して穏やかで平穏なものではないでしょう。そこには、厳しい現実や試練が待ち構えているでしょう。けれども、どんなにつらく苦しくとも、決して挫けてはなりません。どんな苦しみも困難も、一つ一つそれを乗り越えていってこそ、あなたは人間としてさらに大きく成長していくのですから。そして私は、あなたがより大きく、より豊かな人になってくれることを切に願っています。

昨今では、女性が社会へ進出し、重要な責務を果していくことは、もう当り前のこととして受けとめられています。実社会での女性の活躍の場は、あなた方の努力と力量次第で、さらに大きく拡がっていくでしょう。社会の側でも、それを求めています。しかし、それだけに、社会があなた方を見る目も、いちだんと厳しさを増してくるでしょう。甘えは許されません。自らを厳しく律する心を、あなた方一人一人が、しっかり持っていただきたい。新しい女性の道は、あなた方自身が切り開き、築き上げていかなければならないのです。高村光太郎に、「道程」という詩があります。あなた方の前途への祈りをこめて、まず、この詩を、あなた方に送りたいと思います。

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた廣大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

私の家の庭先に、紅白二本の梅の木が植わっています。この文章を書いている今は、まだ小さな蕾ですが、あなた方の卒業式が近付く頃になると、早春の日差しの中に、馥郁(ふくいく)として清楚な花が開きます。ですから、三月が真近になると、私の頭の中には、毎年、この寒梅の姿と卒業式とが重なり合って浮んでくるのが常なのです。

寒梅は、厳しい冬の寒さの中に、静かに立っています。一月から二月にかけて、最も寒さの厳しい寒中の季節に、寒梅はひそやかにその蕾をふくらませているのです。寒気の中に、凛(りん)として空を仰ぐ寒梅には、一見人を寄せつけないような厳しさがあります。しかし、その寒梅に近付き、真近に顔を寄せてみると、その蕾のなんと馨しく、ふくよかで、気品に満ちていることか。周囲の寒気の厳しさとは逆に、ほんのりと温いぬくもりすら伝わってくるような、柔らかさと優しさをたたえています。

これから学窓を巣立っていくあなた方は、実社会という厳しい風雪に耐え、寒風の中に

も、凛として立つ寒梅の厳しさを持たねばなりません。しかし、同時に、あなた方は、人間としての、優しさと温かさを、絶えず内にそなえ持っていて欲しいのです。寒空に開く寒梅の蕾のように。

ここまで書いてくれば、もうあなた方にも、私が送ろうとしているもう一つの詩がどんな詩かおわかりだろうと思います。そうです、校祖新島襄の「庭上の一寒梅」の詩です。新島はこの詩を、死を真近にした大磯の病床で詠んだと伝えられています。だからこの詩には、その決して長くはなかったが、しかしきわめて偉大であった生涯のきわに、まことの人間の生きようを示した、新島の静かで熱いメッセージが托されていると言ってもよいでしょう。同志社での学びの業を終えるにあたって、どうかこの詩の意味するところを、今一度、心に深く留めておいていただきたいと思います。

庭上の一寒梅
笑って風雪を侵して開く
争わず　又　力(つとめ)ず
自ら占む百花の魁(さきがけ)

（同志社女子大学長）